

# 富山大学アーカイブズ・ニュースレター

—富山大学の未来をひらくアーカイブズ—

ARCHIVES NEWS LETTER

2024.3.18 第11号

## 師範学校ゆかりの資料

アーカイブズ室長 鈴木 景二

今年の元日の夕方、能登半島地震が発生し、富山市でも震度5強という大きな揺れが観測されました。被災されたみなさまに、心からお見舞いを申し上げます。富山大学アーカイブズ歴史資料館には、被害はほとんどありませんでした。

さて、資料館が開館して2年が過ぎました。去年は教育学部の同窓会である富山大学教育学窓会から、富山師範学校旧蔵の以下の5部の書籍を御寄贈いただきました。ちなみに教育学部は、富山大学前身校のなかで最古の「新川県小学校教員講習所」を源流とする学部です。講習所は明治6年（1873）10月の開設で、昨年150周年を迎えました。

アンデルソン著、末松謙澄訳輔『日本美術全書』2冊、八尾書店、1896年 \*

マハン著、水交社訳『海上権力史論』2冊、東邦協会、1896年 \*

マハン著、水交社訳『海上権力史論 仏国革命時代』2冊、東邦協会、1900年、\*

東京美術学校編『法隆寺壁画』2冊、墨彩堂、1920年

本間晴編『歴代天皇御宸翰』皇徳奉賛会本部、1927年

このうちの\*を付した書籍は、桐の箱入りで「宮内省御下賜」という上書があり、紐が懸けられていた跡もあります（写真1）。おそらく受け取った学校側が宮内省から賜ったということで、桐箱を作って貴重品扱いにしたと想像されます。当時、こうした書籍が国策として教育機関に配布されたと考えられ、その時代背景などが検討課題となります。これらは本学附属図書館の蔵書として登録し、歴史資料館に展示しています。



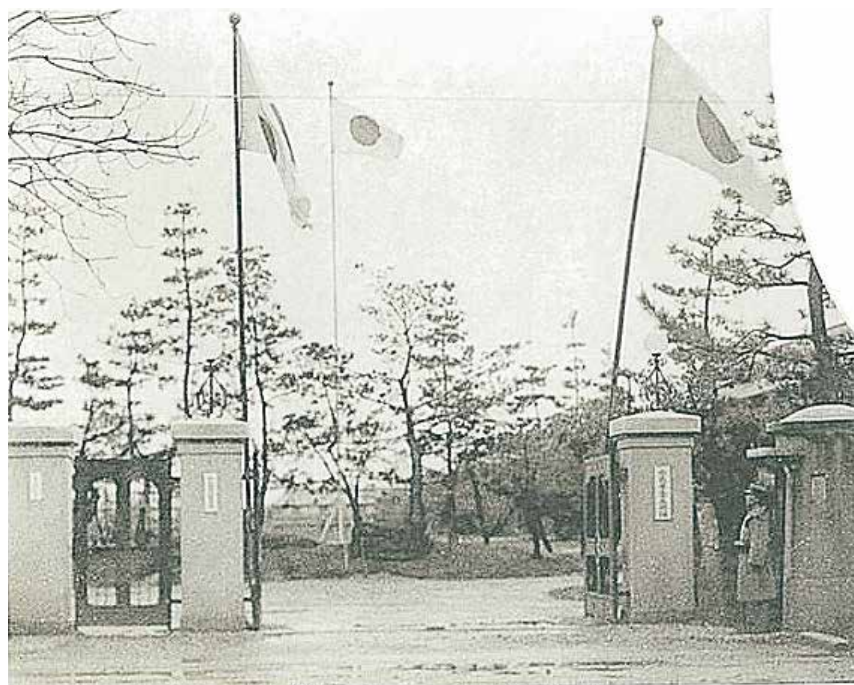
写真1 寄贈された書籍のうち「海上権力史論」

これらの書籍を受け取りに富山県教育記念館にある学窓会へおうかがいした際、師範学校の校旗および当時の五福キャンパス正門(写真2)に掛けられていた表札が保管されていることもわかりました。

ところで、キャンパスの正門になぜ師範学校・教育学部の表札だけが掛かっていたのでしょうか。じつは五福キャンパスができたきっかけは師範学校にあります。同校は現在の富山市立南部中学校の場所にありましたが、1945年8月の富山大空襲で校舎を失い、やむなく他の学校の校舎を使用しました。そしてまもなく終戦。教職

員は、進駐していた連合軍に、接收されていた旧富山連隊跡の借用を交渉し、苦勞のすえ承諾を得ることができました。こうして五福の連隊の歩兵営が師範学校のキャンパスとなり、残っていた兵舎がそのまま校舎になりました。連隊の門柱の表札(写真3)も掛け替えられました。このように連隊跡(五福キャンパス)が師範学校・教育学部のみのキャンパスだった時期があったのです。

その後、富山高等学校・富山薬学専門学校・高岡工業専門学校・富山師範学校及び富山青年師範学校の五校を統合して富山大学が設置されるにあたり、改めて新キャンパスの設置が構想され呉羽山西麓案



隊聯五十三第兵歩

写真3 1930年ころの富山連隊正門(絵葉書「第三十三回軍旗拝受記念」から)



写真2 富山大学教育学部・富山師範学校のみだった時期の五福キャンパス正門。  
「追憶 1950」(富山師範学校 昭和25年度卒業アルバム)の写真。富山大学附属図書館のWEBサイト「富山大学開学50周年記念写真展示50選」から転載。

なども検討されましたが文部省の認可を得られず、最終的に師範学校のある連隊跡が、そのまま富山大学の校地に決まりました。学窓会所蔵の表札には、このような歴史がこめられています。

大学内外に、まだいろいろな歴史資料が残されていると想像されます。そうしたものがございましたら、ぜひ情報をお寄せくださいますようお願い申し上げます。



旧 高岡高商 校舎

2024年9月、本学経済学部は創立100周年を迎えます。より正確には、経済学部の前身となった高岡高等商業学校が1924（大正13）年9月に設置されてから100周年であり、戦後の新制大学における経済学部となったのは1953年です。しかしそこに至る経緯はやや複雑であり、学生や教職員であっても十分知られていないのではないかとと思われるので、今回は経済学部の歴史を簡単にたどってみます。

大正時代の日本では、経済・産業が発展するなか高等教育機関への進学を希望する者が増加し、産業界からも人材育成の要望が高まっていました。1919（大正8）年2月、原敬内閣のもとで高等教育令が改定され、各地で高等学校や専修学校が新たに生まれます。こうした流れのなか、13番目の官立高等商業学校

が設置されました。それが「高岡高等商業学校」（以下、高商）です。80万8540円の予算が必要とされたうち、32万円を地元が負担することとなり、前田侯爵家からの5万円をはじめとした有志からの寄付と、富山県からの支出をもって賄われました。

高岡市に商業の学校が置かれたのは、銅器・漆器製造をはじめとして経済活動が活発であったためです。また、当時の文部次官だった南弘が高岡ゆかりの人で、彼の尽力も影響しています。それゆえ南は「高岡高商の生みの親」ともいわれます。

さて、第1回入試は1925年3月に行われ、定員160人に対して志願者は750人、入学したのは163人でした。また教官数は開校当初こそ6人でしたが、翌年には計13人に増員されています。その頃に着任した教官では、ウィーン大学から帰朝したばかりの上原専禄（ドイツ中世史）や、戦後に経済学部長にもなった大熊信行（マクロ経済学・評論家・歌人）といった教授たちが有名でしょう。上原は高商にいたのは2年と短いものの、その間に高商創立10周年記念事業の一つとして企画された『富山売業史史料集』の編纂という難事業に着手しました。1935（昭和10）年3月には全3巻2300頁に及ぶ貴重な史料集が完成し、富山県の歴史研究にとって計り知れない遺産となっています。

しかし徐々に高商も戦時体制になっていきました。1940（昭和15）年に「東亜科」が新設され、「日本海経済研究所」も開設されました（高商が大学ではなかったため管制外の機関）。東亜科の選択科目にロシア語があったことに示されるように、「満州」・中国のみならずロシアも視野に入れた教育・研究を進めることが意図されており、当時の情勢が影響していたことは言うまでもないでしょう。

さらに戦況が悪化するなか、産業・工業を重視する政府方針のもと、13あった全国の高等商業学校のうち彦根・和歌山・高岡が工業専門学校に転換されることになり、1944年、高岡高商は「高岡工業専門学校」（以下、工専）となりました。在校生がまだいた高商は「高岡経済専門学校」（以下、経専）と改称、残る2・3年生が卒業するまで工専に付設される形となり、1945年9月、全員の卒業をもって経専は廃止されました。

戦後になると工専を存続させるか経専を復活させるかが問題となりましたが、県議会は工専存続を決定、国もそれを認めます。しかし1949年5月に新制富山大学が開設すると、富山市蓮町にあった文理学部（旧制富山高校を継承）の中に、文学科・理学科とならんで「経済学科」が設置されました（定員

100人)。こうして経済の高等教育機関が富山に復活しましたが、これには大学設置委員会の委員長であった上原専祿（東京商科大学）の助言があったとされます。なお工専は富山大学工学部となり、1985年に五福に移転するまで高岡の地にありました。現在この場所は高岡高校がありますが、中庭の池やイチョウ並木は今も残されています。また以上見てきたように、経済学部と工学部は同じ根から生まれた学部です。高岡時代の門柱1対がそれぞれの学部の敷地に立っていることが、それを伝えています。

経済学科の入学志願者は戦後復興が進むなか急増しました。日本海側に経済学科・学部を擁する国立大学が当時なかったこともあって学部への昇格を求める動きが高まり、ついに1953（昭和28）年8月、「経済学部」が開設されました（定員160人）。翌年は五福に校舎と附属図書館が建設され、1957年2月までに蓮町からの移転が完成しています。

相前後して、働きながら学びたい人のための高等教育機関を県内に設置しようという動きも生まれます。商工業県であることをふまえ経済と工学を学ぶ夜間の教育機関設置が目指されたものの、工学部での設置は見送られ、1959年4月に「富山大学経営短期大学部」が経済学部と併設される形で誕生しました（定員80人）。経営短大は1986年に募集が停止されていますが、経済学部の夜間主コースとなっておおその役割を果たし続けました。しかし夜間主も2024年度からの募集が停止となり、100周年を迎えた今、経済学部の歴史に一つの画期が訪れているといえるでしょう。

最後に、日本海経済研究所についても触れておきます。同研究所は高商の終焉とともにその歴史を終えましたが、戦後の経済学部を設置された「北陸経済研究所」に承継され、幾度かの名称変更を経たのち「極東地域研究センター」（2001年）となりました。さらに2023年からは「サステナビリティ国際研究センター（GRASS）」と改称し、富山から環日本海世界さらにはその彼方を視野に入れた、グローバルな研究と国際交流を進めています。



高岡時代の工学部

## ●お願い

富山大学（富山師範学校、富山女子師範学校、富山青年師範学校、富山薬学専門学校、旧制富山高校、高岡高等商業専門学校、高岡工業専門学校、旧富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学）に関する様々な資料の収集を行なっています。ご寄贈若しくはご貸与いただけるような富山大学の歴史に関する資料がございましたら、アーカイブズ事務室（TEL.076-445-6179）までご連絡いただければ幸いです。

※本誌「アーカイブズ・ニュースレター」の既刊分は、WEBサイト「富山大学学術情報リポジトリ」のインデックス「Z. その他」の項目に記載されています。